

文章中の-----は、「国語デジタル教科書」に収録されている資料や機能です。

読むこと教材(文学)

「海の命」(六年)

—読みの交流を視覚化することで、お互いの読みを深め合う—

文学教材を読む授業において、指導者用「国語デジタル教科書」(以下、デジタル教科書)の効果的な活用のしかたはたくさんあります。今回は、数ある方法の中から、読みの交流場面で書き込みツールを効果的に使う方法を中心に紹介します。根拠となる叙述や、友達の考えを視覚化することにより、お互いの読みを深め合う実践です。

六年の最後に扱う文学教材である「海の命」は、登場人物の関係を捉えながら、読み取った人物の生き方について考え、話し合うことができるため、中学進学を控えるこの時期の子どもたちにとって、とても有意義な教材です。この教材を中心にしながら、人生や命などの大きなテーマへと広げ、他の教材と関連させながら単元を組み立てていくことも考えられます。

本単元では、「海の命」も含めた立松和平の作品から〈命のメッセージ〉を読み取り、それを、感想文・詩・エッセイなどの形式で、自分の〈命のメッセージ〉としてまとめます。そのためには、まず、この教材の登場人物の関係をしっかりと捉え、人物の生き方について考えることが

指導目標

- 立松和平の作品を読み、登場人物の相互関係や心情、場面についての描写を捉えたり、優れた叙述をもとに作者の〈命のメッセージ〉を読み取ったりしながら、自分の考えをまとめることができる。【読1)エ】
- 立松和平の作品を読んで、考えたことを発表し合い、自分の考えを広げたり深めたりすることができる。【読1)オ】

指導計画(全10時間)

- | | | |
|-----|----|---------------------|
| 第1次 | 1時 | 学習の見通しをもち、学習計画を立てる。 |
| 第2次 | 2時 | 「海の命」を読み、全体像を捉える。 |

デジタル教科書の活用場面①
登場人物を整理しながら、文章の全体像を捉える。

3時
〈命のメッセージ〉に迫るための「読みの課題」について話し合う。

デジタル教科書の活用場面②
疑問に思ったところや、みんなで読み深めたいところを共有する。

- | | |
|----|---------------------------|
| 4時 | ・「読みの課題」ごとに読みを深める。 |
| 5時 | ・「太一、おとう、与吉じいさの人物像」について |
| 6時 | ・「どうして太一はクエを打たなかったのか」について |

デジタル教科書の活用場面③
交流場面でお互いの読みを深め合う。

- | | | |
|-----|---|---|
| 7時 | 「海の命」から読み取った〈命のメッセージ〉について、自分の考えをまとめる。 | |
| 第3次 | 8時 | 立松和平の他の作品から読み取った〈命のメッセージ〉について、自分の考えをまとめる。 |
| 9時 | 「命」についての考えを交流する。(座談会) | |
| 10時 | 表現形式(感想文・詩・エッセイなど)を選択し、自分の〈命のメッセージ〉をまとめる。 | |

並行読書



1974年生まれ。広告代理店勤務を経験した後、27歳で公立小学校教諭に。横浜市小学校国語研究会を中心に市内の国語教育推進に取り組む。平成24年度文部科学大臣優秀教員に選ばれる。

デジタル教科書の活用場面①
登場人物を整理しながら、文章の全体像を捉える

① 登場人物を整理しながら、文章の全体像を捉えるための手立て
② 疑問に思ったところや、みんなで読み深めたいところを共有するための手立て
③ 交流場面でお互いの読みを深め合う手立て

本単元では、第二次において、「海の命」から〈命のメッセージ〉を読み取り、自分の考えをまとめる学習を設定しています。そのために、まずは「海の命」の全体像を捉えていきます。ここで大切なことは、漠然と読み進めながら全体像を捉えるのではなく、目的につながる読み、つまり、〈命のメッセージ〉を読み取ることにつながる「読み」を進めていくこ

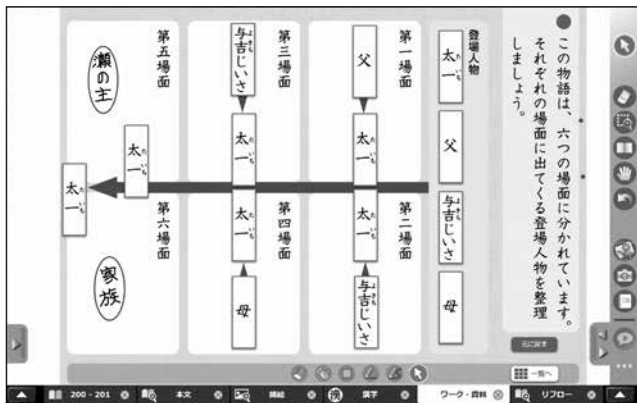
とです。登場人物の関係と、さまざまな人物と関わりながら成長していく太一の様子を捉えることが、それにつながると考えました。

そこで、デジタル教科書のワーク「場面ごと」に登場人物を整理しましょう。①を適用します。このワークは、主要な登場人物を選択して自由に動かすことができるので、それぞれの場面にどんな人物が出てくるのかを整理することができます。ここでは、場面ごとの登場人物を単純に整理するだけでなく、人物どうしの関係を意識しながら並べていきます。

例えば、第一場面では、登場するのは中心人物の太一と父ですが、太一は父の影響を受けて育ってきたことを読み取ることができるので、それが分かるように人物を配置します。第二場面では、太一が弟子入りした与吉じいさと太一の関係を意識しながら人物を配置していきます。こうすることによって、人物関係マップのように、人物関係の全体像を視覚的に捉えることができます。

またこの活動で、さまざまな人物と関わりながら成長していく太一の様子も意識させたいところです。そこで、父や与吉じいさなどの人物に影響を受けながら、

一人前の漁師へと成長していく太一の様子が視覚的に捉えられるように、人物の配置を工夫し、矢印を使って表現しました。さらに、黒板には、①おとうの死 ↓ ②与吉じいさへの弟子入り ↓ ③与吉じいさの死 ↓ ④父の瀬へ ↓ ⑤瀬の主との出会い ↓ ⑥その後」と展開していく場面の流れを整理しておきました。子どもたちが、場面どうしの関係を捉えられるようにするためです。



▲※1 「海の命」のワーク「場面ごとに登場人物を整理しましょう」

デジタル教科書の活用場面② 疑問に思ったところや、 みんなで読み深めたいと ころを共有する

「海の命」の全体像を捉えた後は、子どもたち一人一人が自力読みを行い、疑問に思ったところ（言葉・文）や、みんなで読み深めたいところを見つけ、共有します。まずは、少人数のグループごとに「読みの課題」を出し合い、共通点や相違点を見つけながら共有し、整理していきます。その後の全体共有の場で、ある程度精選された課題（みんなで読み深めたい課題）が出てくるように、その場で解決できる課題については、グループ内でどんどん解決していきます。それから、全体の場で、「読みの課題」を出し合い、整理していきます。その際に、板書とともに、デジタル教科書を活用しました。

例えば、太一、おとう、与吉じいさの言動に着目し、もつとみんなで深めたいと考える子どもたちが多くいました。課題を板書するとともに、子どもたちが着目した叙述を、デジタル教科書上に示していきます。教科書スクロール機能を使い、ページをまたいで教科書画面を表示します。そこに、それぞれの人物について

いう叙述に着目しながら考えていきました。その際、デジタル教科書の二画面表示の機能を使いました。例えば、「与吉じいさの人物像」に関連する叙述が、課題（太一はクエを打たなかった）と関連があるという意見が出た場合、※3のように、左画面に、「課題に関連する叙述」、右画面に「与吉じいさの人物像」に関連する叙述を映し出しました。「おとうの人物像」と関連した考えが出た場合には、同様に「おとうの人物像」に関連する叙述を右画面に映し出しました。二つの教科書画面を使い、根拠を明確にしながら交流できるようにしました。

また、子どもたちが着目した叙述とクライマックス場面および最後の場面についての関連性についても、書き込みツールを使って明らかにしていきました（※4）。瀬の主を目の前にして葛藤する太一の心情とその後太一の様子について考えることで、読みを深めることができると考えたからです。さまざまな葛藤の中で揺れ動く太一の心情を、一つ一つの叙述から丁寧に読み取っていく子どもの姿が見られました。そして最終的には、太一の生き方を通して、子どもたちは自分なりに〈命のメッセージ〉を受け取ることができました。



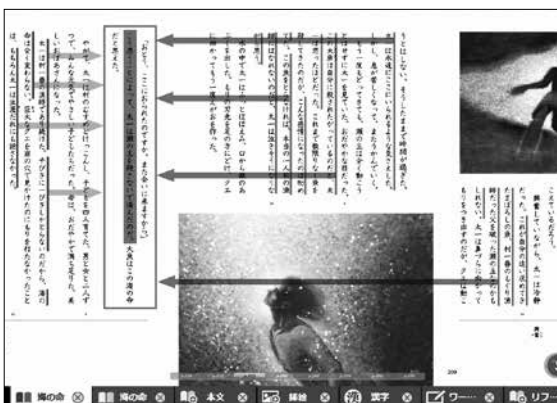
▲※2 叙述を、人物ごとに色分けした教科書画面

ての叙述を、書き込みツールで色分けすることによって、それらの叙述は、それぞれの人物像につながることで、さらに、三人の人物は、それぞれが深く関連し合っていることが視覚的に捉えられました（※2）。そして、「太一、おとう、与吉じいさの人物像」について読み深めるということが、みんなの共通の「読みの課題」になっていきました。

また、子どもたちが着目した叙述をデジタル教科書に整理していくと、クライマックス場面に集中していることが分



▲※3 二つの教科書画面
（左：課題に関連する叙述／右：与吉じいさの人物像）



▲※4 クライマックス場面および最後の場面

かってきました。第二次の初めの段階では、子どもたちは、自分が着目した叙述を中心に考えていましたが、デジタル教科書上に視覚化された、友達が着目した叙述を俯瞰的に見ることで、それぞれの叙述の関連性について考えられるようになっていきます。そして、21ページの「こう思うことによって、太一は瀬の主を殺さないで済んだのだ。」という叙述に着目しながら、「どうして太一はクエを打たなかったのか」という課題について考えていくことになり、これがもう一つのみんなの「読みの課題」となりました。

デジタル教科書の活用場面③ 交流場面でお互いの読み を深め合う

みんなの「読みの課題」が決定した後、課題ごとに読みを深めていきます。本単元では、主に、「太一、おとう、与吉じいさの人物像」と「どうして太一はクエを打たなかったのか」について読み深めることにしました。ここでは、後述の課題を例として取り上げます。一人読み、そしてグループでの交流の後、全体交流の場で、「こう思うことによって、太一は瀬の主を殺さないで済んだのだ。」と

デジタル教科書を活用して

文学教材を読む授業において、いわゆる読みの交流がよく行われています。お互いの読みを交流するために、付箋を使ったり、短冊を使ったりしながら、より根拠を明確に、視覚的に捉えられるように工夫した手立てが試みられています。今回、デジタル教科書を活用することによって、その手立てがより効果的なものになりました。お互いの読みを交流する際、教科書や板書を行ったり来たりしながら、友達が説明する根拠を探したり、叙述どうしの関連性を意識したりすることが難しいと感じる子どももいます。その点、みんなで同じ画面を見ながら、情報を視覚化できるデジタル教科書は、とても有効なツールといえるでしょう。また、叙述を根拠にして自分の解釈を明らかにしたり、優れた叙述について自分の考えをまとめたりするために、一つ一つの言葉に着目させる手立てでも有効です。

昨今、アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善が求められている中で、「言葉で理解したり表現したりしながら自分の思いや考えを広げ深める学習活動」の重要性が指摘されています。言葉に着目させる手立ての一つとしても、デジタル教科書を活用したいものです。